

障害のある人の世界にふれる

『シティ・ライツ』が耕してきた バリアフリー映画鑑賞という文化② ～シアター同行鑑賞会編～

取材・文 小笠原 綾子

おがさわら・りょうこ 自分事と思える仕事や活動をする“複業”を実践中。ライター・編集者としてインタビュー記事作成や印刷物の制作をするほか、地域コミュニティ活動にかかわる。

視覚障害者と晴眼者*1が一緒に映画館に行き、“実況中継”（ライブ音声ガイド*2）で映画を楽しむ。これは、バリアフリー映画*3鑑賞推進団体シティ・ライツが、20年前から行っている「シアター同行鑑賞会」という活動です。中心となって企画・運営している、シティ・ライツ副代表の美月めぐみ（みづき・めぐみ）さんと、サポートメンバーの鈴木橙輔（すずき・だいすけ）さんに話を聞いてみると、目が見える人にとっても、体験する価値のあるイベントだということがわかりました。

※3月号掲載「『シティ・ライツ』が耕してきたバリアフリー映画鑑賞という文化①～音声ガイド制作編～」の続編です。

はじめは「こそこそガイド」

「どうしても映画を観たいときは、一緒に映画館に行った人に“こそ”と耳打ちしてもらおう。そうやって映画鑑賞する

視覚障害者は珍しくないのですが、当初、映画館の人はそんなに気にしていなかったと思います。でも、一人の“こそこそ”は“こそこそ”だけど、30人もいたら“こそこそ”レベルじゃなくなる（笑）」

そう話すのは、シティ・ライツ副代表の美月めぐみさん。全盲の舞台女優です。シティ・ライツが設立された2001年当時、映画会社が公式に音声ガイドを用意するバリアフリー映画は、日本にはほとんど存在しておらず、音声ガイド付き映画を鑑賞する環境は、「自分たちの手で作るしかなかった」そうです。

その第一歩が、「こそこそガイド」によるシアター同行鑑賞会。鑑賞作品は、邦画か外国映画の日本語吹き替え版。晴眼者が視覚障害者の隣に座り、耳元で「こそ」と解説するこの鑑賞会は、晴眼者の伝えるスキルにばらつきがあるという問題がありながらも、口コミで広まっていきました。



①参加者は映画館の最寄駅に集合。視覚障害者と誘導役の晴眼者がペアとなり、好きな映画の話などをしながら映画館に向かう。②映写室からライブ音声ガイドを届ける様子。右に写っているのが、シアター同行鑑賞会を運営する中心メンバーで、ライブ音声ガイド歴18年の檀鼓太郎さん。バリアフリー活弁士としても活動 ③シティ・ライツで保有しているFMラジオ。映写室からFM電波で客席に飛ばされた音声ガイドを、FMラジオでキャッチし、イヤホンで聴くことができる 提供：シティ・ライツ





◀シアター同行鑑賞会を運営する中心メンバー、シティ・ライツ副代表の美月めぐみさん（右）と、ライブ音声ガイドなどを担当する鈴木橙輔さん（左）。お二人はご夫婦

劇場の観客に迷惑をかけないように、そして、日本語吹き替え版のない外国映画を鑑賞したいというリクエストに応えようと、試行錯誤^{*4}の末に考案されたのが、FMラジオを使う現在のスタイル。歌舞伎のイヤホンガイドにヒントを得たそうです。映写室に入れてもらったメンバーたちが、場面解説をしたり吹き替え版のない外国映画の日本語字幕（セリフ）を読んだり。参加者は、FM電波で客席に飛ばされたその音声ガイドをラジオでキャッチし、イヤホンで聴きます。

「最高で8人、映写室に入ったことがあるんです。『オーシャンズ13』のときですね。場面解説をする人と、セリフを読む人とで」

と、鈴木さんが言うと、
「聴いているほうも大変でしたよ、一人一役じゃないから収拾がつかなくて（笑）」

と、このときライブ音声ガイドを聴きながら、劇場で鑑賞していた美月さん。

最初は、場面解説をする人と字幕（セリフ）を読む人で、担当分けしていたものの、回を重ねるごとにブラッシュアップされ、一人でマルチにこなす“ハイブリッド音声ガイド”になっていったそうです。

（この話を聞いて、後日、シティ・ライツの活動を設立当初から支えるサポートメンバーの檀鼓太郎〈だん・こたろう〉さんによる“ハイブリッド音声ガイド”の映画鑑賞を体験したところ、男性と女性、子どもと大人の、キャラクターを巧

みに演じ分けた、違和感のないガイドでした）

ライブ音声ガイドは、目で見た光景を瞬時に言葉に変換する場面解説を、セリフとの間合いやリズムを考えながら提供するもので、経験とセンスが求められます。そんななか、ライブ音声ガイド歴15年の鈴木さんは、「視覚障害者と晴眼者が、同じタイミングで驚いたり声を発したりできるガイド」を届けることを、常に心がけているそうです。

安心して快適な時間を 過ごしてほしい

シアター同行鑑賞会は、
映画館の最寄駅に集合▶視覚障害者と晴眼者がペアになり映画館へ▶ライブ音声ガイドによる映画鑑賞を堪能▶食事会（約2時間）で交流

という流れのイベント。事前準備などを担っているのは、美月さんです。劇場との交渉、開催告知、参加者リストの作成からメールでの連絡、食事会の店の予約も担当しています。

視覚障害者と晴眼者のペアを決めているのも、美月さん。

「参加申込の際、視覚障害者か晴眼者かということに加えて、性別も教えてください。この情報は、お手洗いの誘導に関係してくるからです。それも踏まえて、ペアを考えています」

美月さんの心配りは、それだけではありません。

「リピーターが多いので、それぞれの映画の好みなどはだいたい把握しています。参加者リストをつくりながら、『この人とこの人をペアにしたら、劇場までの会話が弾みそう』とか、考えるのが楽しい」

もう一つ、この鑑賞会ならではのことがあります。それは、参加者に「事前解説」をメールで送ること。視覚障害者は読み上げソフトを使ってテキストを“聴く”ことで、映画の内容を想像できます。「たとえば、こんな感じ」と、鈴木さんが教えてくれました。

「まず、魚の鯛を思い浮かべてください。鯛が白黒の牛柄になって、鼻っ面にはドリルが生えています。四つ足になって四つん這いで進みます。っていう怪獣なんているわけないと思うでしょ？これが、グビラという怪獣です」

そして、シアター同行鑑賞会で特に大切にしているのは、鑑賞後の食事会。美月さんは、こう話します。

「食欲にストーリーを理解しようとする視覚障害者は多い。だけど、音声ガイドを聴いても、ちょっとストーリーを外していたり誤解していたりします。食事会は、そういった部分をフォローし合ったり、感動を共有したりする場なんです」

参加者がいる限り

それが一人でも続ける

真っ暗な劇場で、目を閉じて、ライブ音声ガイドを聴きながら映画を楽しむ。



◀とあるシアター同行鑑賞会での一コマ。この鑑賞会は、開催者と参加者との間に垣根のない、「映画好きサークル」 提供：美月めぐみ

それは晴眼者にとって、新鮮な体験ができる、もう一つの映画鑑賞スタイルとも言えるのではないのでしょうか。

鈴木さんは、こう言います。

「場面解説は、映画を楽しんでもらう材料の一つ。それに加えて、セリフと効果音があります。タイミングよく材料を提供するのが僕の役割。音声ガイドは、鑑賞している人の頭の中で出来上がると思っています」

ライブだからこそそのハプニングを楽しめるのも、この鑑賞会の魅力です。

「たまに、名前を間違えるんですよ。たとえば、『ジョン』と『ジョージ』と『ジョーデー』という、頭文字が同じ登場人物がいたら、ゴチャゴチャになったり。だけど、しょうがないと思っているから。聴いている側も『あっ、やっちゃったな』と思いつつ、楽しんでいきます（笑）」（美月さん）

「もっとよく考えて名前つけてくださいよ、と思ったりもします（笑）。わかりやすくできないかな、ということは考えますよ。『ジョン』を『兄』に言い換えるとか」（鈴木さん）

バリアフリー映画鑑賞の推進に長年取り組んできた、美月さんと鈴木さんが今、思うこととは。

「ここ数年、大手映画配給会社でのバリアフリー映画化が進み、視覚や聴覚に障害のある人でも、スマホのアプリ^{*5}を使うことで楽しめる上映作品が増えてきました。それはとてもいいことなのですが、一方では、スマホを使える人と使えない人との格差が生まれているのが残念なところですよ。

それともう一つ、『自分は音声ガイドがなくても理解できるから』と、あえて利用していない視覚障害者もいますが、『利用すると、もっと映画を楽しめるんだよ』と、伝えたいですね」（美月さん）

「アプリが開発され、映画を楽しむ選択肢が増えたのは、とてもいいことだと思います。シアター同行鑑賞会の参加者は減ってきましたが、参加者がいる限り、それがたとえ一人だったとしても、僕たちはこの鑑賞会を続けていきますよ」（鈴木さん）

*1 視力や視野に障害のない人。

*2 主に、日本語吹き替えなしの外国映画に対応。劇場で、場面解説（ナレーション）に加えて、感情を込めて日本語字幕（セリフ）を読んで届ける音声ガイド。

*3 様々なアクセスバリアを抱えた人たちと一緒に楽しめる映画。最も映画鑑賞が困難とされる視覚障害者も、セリフの合間に場面の視覚情報を補う解説を付けるなどして、バリアフリー化を実現。

*4 「こそこそガイド」が漏れないように、防塵マス

クの中に小型マイクを仕込んでしゃべったり、ペットボトルを加工してウレタンを詰めた“消音筒”を口に当ててみたり、音声ガイドを録音したMD（ミニディスク）をたこ足配線のイヤホンで聴いてもらったりと、様々な試行錯誤を重ねた。

*5 HELLO! MOVIE（ハロームービー）や UD Cast（ユーディーキャスト）。スマートフォンやメガネ型端末（スマートグラス）を使い、聴覚障害者はメガネ型端末で字幕を読みながら、視覚障害者は携帯端末で音声ガイドを聴きながら、映画を楽しむことができる。

お話を聞いた人



みつき
美月めぐみさん（左）

1964年、福島県生まれ。筑波大学附属盲学校専攻科音楽科卒。バリアフリー映画鑑賞推進団体シティ・ライツ副代表。バリアフリー演劇結社ばっかりばっかり所属の全盲役者。ライフワークは「誰にでも楽しんでもらえるエンターテインメント」の追及！

すずきだいすけ
鈴木橙輔さん（右）

1969年、東京都生まれ。勝田声優学院卒。バリアフリー演劇結社ばっかりばっかり主宰。脚本家・演出家、役者として活動しつつ、バリアフリー映画鑑賞推進団体シティ・ライツでは、音声ガイドディスクライバーとして、「誰にでも楽しんでもらえるエンターテインメント」を追及している。

《バリアフリー映画鑑賞推進団体
シティ・ライツ》

<http://www.citylights01.org/>

月刊 ケアマネジメント

4月号

特集

理想の看取りができる場所

真剣に「最期まで」と向き合います

長尾和宏の
「在宅介護を楽にする極意」
抗認知症薬の真実

視点

高齢者の安全なネット利用に向けて

